

都市文化研究 3号 237 - 238頁, 2004年
Studies in Urban Cultures

映像の比較社会学の可能性を求めて — オーストラリア編 —

石 田 佐恵子

本報告は、『都市文化研究』第1号（2003年3月）に掲載された在外研究レポートの続編である。石田佐恵子は、2002年度 COE 事業推進協力者として、2003年1月19日より3月11日まで、インドネシアならびにオーストラリアに海外出張した。出張期間の前半は主にジョグジャカルタ・サブセンターの運営にあたり、後半は研究ネットワーク構築のためにオーストラリアへと移動した。

ここでは、主に後半期のオーストラリアでの研究活動について報告する。研究ネットワーク構築の地点は主に2つ。ひとつは、オーストラリア国際ドキュメンタリー会議に参加し、映像研究に関する最新の知見を広めることである。他方は、シドニー周辺の大学間組織、アジア太平洋社会変容研究センター（CAPSTRANS）を訪問することである。

2月16日早朝にブリスベン国際空港に到着後、高速バスでオーストラリア国際ドキュメンタリー会議2003の会場であるニュー・サウス・ウェールズ州バイロンベイへと移動した。ブリスベンからバイロンベイまでは、約4時間の道のりである。バイロンベイは海辺の小さなリゾート地で、800名以上が参加する国際会議のために地元のホテルやB&Bはほぼ満杯状態であった。会議場で受付を終了したのち、初日夜の部会、W・ヴェンダースの作品上映と質疑応答に参加した。W・ヴェンダースは『ベルリン・天使の詩』などで国際的に知られる映画監督であり、今回のドキュメンタリー会議の特別ゲストとして参加していた。上映作品は小津安二郎へのオマージュである『Tokyo Ga』。監督自ら

の解説と質疑応答を交えたオープニングは見応え充分であった。

20日までの5日間、さまざまな研究部会に参加し、世界各国から集まった映像作家、映像研究者たちと交流を深めた。参加者の多くはドキュメンタリー制作者であり、組織に所属する者より独立制作者が多い。地元オーストラリアを中心に、イギリス、アメリカ、カナダなど主に英語圏の各国テレビ関係者も参加し、さながらドキュメンタリー企画や作品の国際見本市の様相である。研究者の数は半数に満たないが、制作関係者に混じって研究発表をすることは、現場に即したより良い国際会議のあり方に思えた。

参加したセッションや特設部会で印象に残るものは数多かったが、主流派の民放キー局（チャンネル9）プロデューサーと反戦活動家のビデオ作家がパネリストになり戦争報道のあり方などを激論するものや、社会的事実を扱うドキュメンタリーの定義・方法論を議論する理論部会など、多くの興味深い論点を集中的に学び、知見を広めることができた。また、ほとんどのセッションでは、映像作品の短いクリップが含まれており、映像を題材にした国際会議のプレゼンテーションの手法についても刺激を受けた。

研究者ネットワークの構築については、地元オーストラリアの映像制作者を中心に交流を深めた。それ以外では、2001年夏に滞在したアメリカ合衆国ボストン在住の研究者、ルーズ・マクブライデ講師（ノースイースタン大学）に再会し、映像研究についての意見交換を行った。また、シンガポールの映像作家タン・ピンピン

や、山形国際ドキュメンタリー映画祭2003（2003年10月）での大賞受賞作品『鉄西区』の監督ウォン・ビン（中華人民共和国）とも交流・意見交換することができた。

この会議の期間中、AV室で自由に作品を鑑賞することができたが、特に意識して見たのは、オーストラリアや英語圏の映像作家が撮ったインドネシアを題材にした作品である。2002年10月に起こったバリ島の爆弾テロ事件を題材にした『バリ 魂の島』、東ティモールとオーストラリアとの関係を描いた『チルドレン・オブ・クロコダイル』、インドネシアの政界を描いた『ブルームーン』など。日本から見たインドネシア像と、インドネシアの隣国オーストラリアから見たインドネシア像とは、合わせ鏡のような奇妙な対照を成していることを発見し、たいへん興味深く思えた。

以上の国際会議の様子の一部を、毎日新聞の連載コラム『風の響き』に「ドキュメンタリーの危機」として掲載した（大阪本社版 文化面 2003/3/7）。

2月24日からはシドニーに拠点を移し、アジア太平洋社会変容研究センターの拠点校であるニューカッスル大学およびウロンゴン大学を訪問した。

ニューカッスル大学はシドニーの北部に位置し、電車で2時間半の距離にある。ニューカッスル大学では、アジア太平洋社会変容研究センター副所長、パメラ・ニラン博士と再会し、インドネシアにおけるメディア研究について簡単なレクチャーを受けた。彼女はインドネシア（主にバリ島）をフィールドとする文化人類学者であり、バリ島におけるテレビ視聴に関する業績を多数持っている。ニラン博士のもとで学んでいるインドネシア人留学生、キウイ講師（インドネシア、ソロ大学）とも親しく交流し、インドネシアのメディア状況について教えを受けた。その他、夏休み期間中にニューカッスル大学を訪れていた他大学研究者とともにセンター主催のディナーを開いていただき、オーストラリア、ヨーロッパ、アメリカ、日本などのメディア研究状況について相互に紹介し、交流を深めることができた。

続いて、アジア太平洋社会変容研究センター

のもうひとつの拠点校であるウロンゴン大学を訪問した。同校はシドニーの南部に位置し、電車で1時間半の距離にある。現地では、アジア太平洋社会学会における数年来の友人、ティモシー・スクラス博士とルチラ・ガングリー博士夫妻の自宅に滞在させてもらい、長旅の疲れをいやしつつ、研究交流を深めることができた。ウロンゴン大学訪問の時期は、ちょうど新学期が開始される週にあたっていたので、両博士の講義にも参加、シラバス提示のあり方、講義評価など、大学教授法についても新しい知見を広めることができた。

ウロンゴン大学では、アジア太平洋社会変容研究センター主催のセミナーを定期的に行っており、それにあわせて研究発表を行った。題目は、「Asian Film as a Genre: Image of Women in Asian Films（ジャンルとしてのアジア映画 アジア映画における女性像）」である。この報告は、2003年1月9日に「アジア・フィルム・フォーラム・マニラ（於フィリピン大学）」で発表したもので、同時に同フォーラムでの議論も紹介した。韓国やインドの映画研究を専門とする研究者・院生とも議論することが出来、実り多いセミナーとなった。また、『演出された「楽園」 バリ島の光と影』（中谷文美訳、世界思想社）の著者、エイドリアン・ヴィッカーズ博士（同センター助教授）とも思いがけず知り合うことが出来、大いに刺激を受けた。

シドニーには出張の最終日まで滞在したが、上記以外にも、シドニー大学、西シドニー大学をはじめ、いくつかの研究機関に訪れる機会があり、様々なネットワークを広げることができた。

参考資料

オーストラリア国際ドキュメンタリー会議

The Australian International Documentary Conference

<http://www.aidc.com.au/>

アジア太平洋社会変容研究センター（CAPSTRANS）

The Centre for Asia Pacific Social Transformation Studies

<http://www.capstrans.edu.au/>